

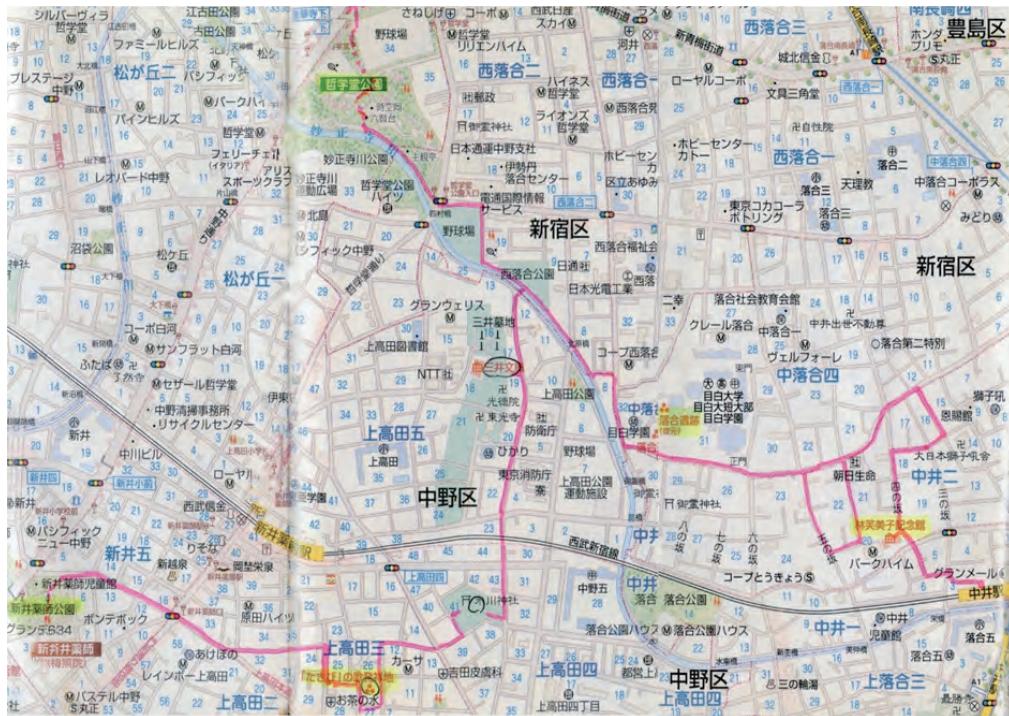
西部新宿線 中井駅から落合・新井薬師へ

2015年5月

中井駅 ⇒ 林芙美子記念館 ⇒ 目白文化村（一部）

⇒ 哲学堂 ⇒ みずの塔 ⇒ (三井文庫) ⇒ 「たきび」の碑周辺

⇒ 新井薬師 ⇒ 中野方面



崖線と坂

散歩の会で以前歩いた野川沿いの国分寺崖線は「ハケ」と呼ばれていたが、神田川と妙正寺川に沿った落合から目白にも崖線の地形がみられる。

ここではこの崖線は「バッケ」と呼ばれていたらしく、南側斜面に多くの坂がある。西武線の中井駅あたりから西に向かい、「一の坂」から「八の坂」まであり、「四の坂」の上り口左側に林芙美子の旧宅がある。

落合の地名は、このあたりで神田川と妙正寺川が落ち合ったことに由来する。



林芙美子の旧居

『放浪記』『浮雲』などで知られる作家・林芙美子が、昭和16年（1941）から昭和26年（1951）にその生涯を閉じるまで住んでいた家。大正11年（1922）に上京して以来、苦労を重ねてきた芙美子は、昭和5年（1930）に落合に移り住み、昭和14年（1939）にこの土地を購入、新居を建設した。新居建設当時、建坪の制限があったため、芙美子名義の生活棟と、画家であった夫・緑敏名義のアトリエ棟をそれぞれ建て、その後につなぎ合わせた。



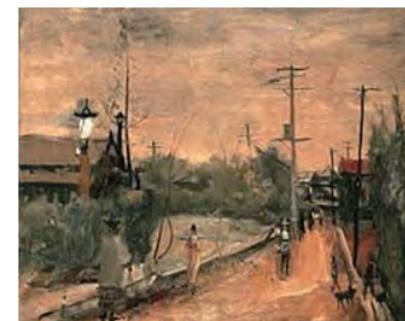
八の坂



林芙美子旧宅

住宅街

林芙美子旧宅から坂を上った辺りには比較的高級で落ち着いた住宅街が続いている。ここから東側はかつて「目白文化村」と呼ばれたところである。目白文化村は、西武を築いた堤康次郎が下落合に開発した郊外型の住宅地である。下落合の大地主から土地を購入したのにはじまり、早稲田大学や近衛家・相馬家などの土地を入手して開発し、1922年から約3万坪を平均約112坪の区画で分譲した。分譲単価は都心に近いということから、翌年売り出しの田園調布より高かった。購入者は官僚、大学教授、芸術家、事業経営者、技術者と多岐にわたり、多様な洋風住宅が建てられた。1927年には西武鉄道新宿線が開通し、交通の便が良くなった。しかし、山手通りの建設で文化村は縦断され、さらに東京大空襲では大半の住宅が焼失し、面影は殆ど無くなかった。更に1967年には新目白通りの開通でさらに分断された。佐伯祐三は、大正9年(1920年)、22歳の時に、この目白文化村の近くにアトリエを構え、フランスへ行くまでの短い期間、下落合風景の油絵を多数描いている。



この界隈には多くの著人が住んでいた。



哲学堂公園

この地は、源頼朝の重臣、和田義盛の城址であった。この公園は、明治37年、哲学者で東洋大学の創立者、井上円了によって精神修養の場として創設された。哲学世界を視覚的に表現し、哲学や社会教育の場として整備された。哲学堂の名前の由来は、「四聖堂」に孔子・釈迦・カント・ソクラテスを祀り、「哲学堂」とも称したことにある。



野方配水塔

1929年に竣工、配水塔としては1966年に使用を停止。現在は中野区の災害用給水槽となっている。地元では「水道タンク」とか「みずの塔」と呼ばれる。塔に空襲時の弾丸の痕跡が残っていることから中野区の平和史跡となっている。



三井文庫

三井文庫本館の所蔵史料は、17世紀半ば以降の三井家（越後屋呉服店・三井両替店）の古文書類と明治以降の三井系企業の経営資料を中心に10万点にのぼる。これらの史料は、三井家編纂室が収集し『三井家記録文書目録』として整理されている史料群と、各家・各会社等の単位でまとめられた史料群とからなっている。

「たきびの歌」発祥の地

新井薬師南の住宅街に、垣根の続く一角がある。地元の大地主の屋敷といったところ。この生垣沿いに、童謡「たきび」のうたの発祥の地と書かれた説明板がある。



新井薬師

中野区最大の寺院。足立区にある西新井大師と同じ真言宗豊山派の寺院。駅前から山門にかけては商店街の続く門前町となっている。新井の名は新たに井戸を掘ったことに由来する。井戸水（白龍権現水）は、一般に開放され、飲用水として多くの人がこの水を汲みに来る。広大な境内には本堂、不動堂があり、境内の一部は公園になっている。毎月第一日曜日に開かれる骨董市は有名で、多くの人たちがあつまる。

百観音明治寺

榮照法尼という尼さんによって、明治天皇の病気快癒を切願し、観音菩薩石像を建立したのが始まり。明治天皇の死後、観音靈場を築こうという呼びかけがあり多くの賛同者によって百観音が揃えられた。百観音とは西国33カ所、坂東33カ所、秩父34カ所の札所の合計100カ所の札所を総称したもので、それらの仏像のコピーを当寺院の境内に祀り、これら全てを拝めば百観音札所すべてをお参りしたご利益があると宣伝した。



落合の火屋

古典落語に「らくだ」というのがある。酒乱で乱暴者のらくだというあだ名をもつ嫌われ者が、ある長屋に住んでいた。話はフグを食って長屋の部屋で死んでいるのを兄貴分がみつけるところから始まる。兄貴分はたまたま通りかったクズ屋を脅し、大家などを脅して供養の

線香代や酒3升を調達する。酒に酔った兄貴分とクズ屋が、早桶にらくだの死体を入れて担ぎ、火屋（火葬場）に運ぶ場面で、次のようなセリフがある。
「ここは早稲田だろう。これを右に切ると新井薬師。まっすぐに行けば落合の火屋だ」。今日ある落合の火葬場の歴史が語られている。

